

## 中学校における A.A.E. (Animal Assisted Education) の理論と実践 (I)

中嶋真理\* 菅原正和\*\*

(2006年2月6日受理)

Mari Nakajima and Masakazu Sugawara

## Animal Assisted Education in Junior High School (I)

## I 序 論

近年、日本における子ども達の対人関係能力の著しい低下が、教育相談・教育現場において度々指摘され、社会問題化してきている。逸脱・違反・攻撃等の非行問題に加え、引きこもり・孤立・表面的で希薄な人間関係等の非社会的特性が注目されている。子ども達が野原や山を駆けずり回り遊びの中で学習し、ごく自然に獲得していた対人関係能力は、一世代前と比較して急速に低下してきており、カウンセラーの増加にもかかわらず対人関係能力の未発達から生じやすいいじめや不登校、虐待等の深刻な状況は依然改善されていない。動物虐待も、かかる青少年の行為障害の一形態として位置付けられている。

米国では、ペット殺しは殺人の前段階という認識があり、殺人犯の7割以上に動物虐待の履歴があることが報告されている。米国精神医学会の診断基準マニュアルDSM-IVの動物虐待に関する記述によると「反社会性人格障害と診断された犯罪者の少年期を調べると、15歳以前に動物虐待をしているケースが多く見られる」という(DSM-IV, 1994)。神戸の児童殺傷事件以来、ようやく日本でも少年犯罪と動物虐待の関係が注目されるようになった。豊かな感情を有する動物を、情動のおもむくまま(または無感情に)殺傷する行

動は極端な共感能力の欠如を示し、犯罪に直結し易いことが知られている。現代の子ども達は他人との関係をうまく形成することが出来ないため自分が傷つくことや失敗を極度に恐れ、いじめが横行する学級環境の中では人と違う行動をとることを極力避け、熟慮による意志決定が困難になってきている。心と共に身体的な触れ合いの機会も減少しており、体がこわばり体に触れられることに抵抗を示す子どもが急増している。特に思春期の中学生は自分の体の激しい変化に戸惑い自尊感情の欠如と、不安と極端な孤立にさらされる。しかし対人関係の形勢が困難な場合でも、そのままの自分を受け止めてくれる動物とは心を通わせることができる一群の子ども達が存在する。動物の存在自体が、そこにいるだけでカウンセラーに匹敵する場合がある。自分を慕ってくれる動物がそこにいると、そこはこころ安らぐさやかな場所であり、居場所を喪失した子どもが自分の行ける場所を得ただけでも救われることがある。

子ども達は自我の形成過程において純粋にペットに愛着を抱く時期がある。M. Robinら(Robin, M. Bense, R., Quigley, J. S., and Anderson, R. K. 1983)によれば、児童期の孤独を克服し青年期の成長した愛情や責任を担う自我形成をペットが手助けをすることがあるという。米国マサチューセッツ虐待防止協会(MSPCA)の調査は、も

し子ども達に動物に対して優しく接することを教えることができれば、彼等はきっと人間に対しても親切になることを示している。

## II A. A. E. (Animal Assisted Education) の系譜と先行研究

### 1) アニマル・セラピー (Animal Assisted Therapy : A. A. T.)

古来人々は動物を伴侶として生活してきたが、現代的な意味でのアニマル・セラピーは、臨床心理学者 B. M. Levinson (1962) による子どもの患者と飼い犬の交流を心理学的に分析したことに始まる。その後多くの研究と実践活動が行われ一般的にアニマル・セラピーとよばれているものは、A. A. A. (Animal Assisted Activity) と A. A. T. (Animal Assisted Therapy) の双方を意味するようになった。1977年に人と動物の相互作用に関する実践、普及、研究活動を支援するため設立されたデルタ協会 (Delta Foundation) の定義は以下の内容になっている。

[A. A. A. (Animal Assisted Activity : 動物介在活動)] 基本的にペットと人々が表面的に触れ合う活動であり、病院や施設などでの特別なプログラムの中に存在するのではない。それぞれの訪問活動などの際には、特別な治療上のゴールは計画されず、活動する人たちも詳細な記録は採らなくてよい。活動はボランティアの自発性に任されていて、必要によってその活動の期間は長かったり短かったりする。

[A. A. T. (Animal Assisted Therapy : 動物介在療法)] 治療上のある部分で動物が参加することが不可欠である。医療側の専門職、医者や看護師、ソーシャルワーカー、作業・心理・言語療法士などがボランティア達の協力のもとに、治療のどこで動物を参加させるかを計画する。治療のゴールが存在し、たとえば「身体的」には動けるようになる、車椅子に乗れるようになること等。「精神

的」にはグループ内での相互関係を形成させたり、不安や孤独感を減らす等。「教育的」には語彙を増やしたり、記憶力を促進させたり、大きさや色などの概念の知識を増やす等。「動機付け」としてグループ活動に参加することや、他人やスタッフとの相互作用が増加するなど。また、活動においては、記録が必要であり、進歩の度合いも計測されなくてはならない。

人間と動物の関係は、特に欧米においては心理学だけでなく、獣医学、医学、教育学、犯罪学などさまざまな分野で興味深い研究テーマとして注目されてきた。1990年に正式に設立された人と動物の相互作用国際学会 I A H A I O (International Association of Human-Animal Interaction Organizations) は、1995年の I A H A I O ジュネーブ大会で次のような宣言を出している。

### [ジュネーブ宣言]・序文

「近年の人と動物の相互関係の研究で、コンパニオン・アニマル (仲間・伴侶としての動物) が、人間の健康、成長、生活の質、福祉にさまざまな利益をもたらすことが証明されてきた。人間が動物を安心して飼うことができ、かつ人間と動物がお互いにより関係を育てるには、動物の飼い主と政府とともに責任と義務があります。これらの活動を推進するために、I A H A I O は1995年9月5日にジュネーブで行われた総会で、五つの基本的決議を行った。I A H A I O では全ての政府機関、関係団体にこの決議を考慮し、促進することを要請する」。

### ・五つの決議

- ① コンパニオン・アニマルが、その動物にとってふさわしい環境で飼われ、かつ他の住民の権利を侵さない限り、人はあらゆる環境においてコンパニオン・アニマルを飼うことができることを世界共通の権利として認める。
- ② 人間の生活環境が、コンパニオン・アニマルとその飼い主の特性とニーズにあったものになるよう、デザイン・設計されてゆくよう保証措

置をとる。

- ③ 学校の授業カリキュラムにコンパニオン・アニマルに関係する教育が取り入れられることを勧め、正しい教育プログラムを通じて、動物たちの存在が児童教育に役立つことを教師や教育者が確信できるよう働きかける。
- ④ 病院、老人ホーム、養護施設などの、動物との触れ合いが必要な人々を世話する福祉施設に、訪問活動として認められたコンパニオン・アニマルが出入りできるようにする。
- ⑤ 心身障害を克服しようとする人々のために訓練された「介助動物」や動物介在療法の有効性について公的な認知に努める。また、「介助動物」の育成プログラムを促進し、健康や社会福祉に携わる専門の基本訓練プログラムに、このような動物たちの能力に関する教育を組み入れる。

さらに2001年に I A H A I O は、A . A . E . (Animal Assisted Education) の定義とその実施の指針を示した。それによると、「動物介在教育は学校において生徒が動物と接する活動である」。そして動物介在教育の指針として、「それに関わる動物は健康診断を受けており、学校に適應するように訓練されており、適切に管理・飼育されている動物福祉にも配慮されていること、A . A . E . の実施者は学校と保護者に対して事前に活動の主旨について十分に説明すること、生徒の知識や学習意欲を向上させ、生き物を尊重する気持ちを持たせ、責任感を養うなどの学習目標が設定されていること」が定められた。この領域での日本における学術的研究報告は最近出始めたばかりであるが、動物と触れ合うことで自己効力感や自尊感情 (self esteem) が高まることや、抑うつや不安の低下につながる事が報告されてきている。1947年 Samuel Ross がニューヨーク州に開設した学校、グリーンチムニーズは、情緒障害や非行に陥った子ども達を救ってきた。家庭内暴力、麻薬乱用、いじめ、自殺未遂等多種多様な過酷な環境の被害者として、この学校にやってきた子ども達は動物達のいる自然環境で自分を取り戻し、社会復帰を

果たしていった。動物を介在させたプログラムで、子ども達はまず動物の親になることを学び、一つの命に責任を持つことを学ぶ。そこから、自尊心や達成感が生まれ、そこでの経験を積むことで癒されていく。人と動物の絆は対人関係にも影響を与え調和をもたらす潤滑油になる可能性がある。

ようやく日本でも、コンパニオンアニマルとしての動物の役割が急激に拡大されてきている。子どもの自我形成に関わる効果として、孤独感、憂鬱感、不安感の減少、自尊心の向上、社会的な触れ合いや協調性の亢進等があげられている。E. Taylorらによれば、特に効果が期待できるのは、長期間の施設入所生活を余儀なくされている高齢者や、人との接触が少ない精神障害者、行動障害の子ども達、ダウン症候群、神経性障害の人々に対してであるという (Taylor, E., Maser, S., Yee, J., and Gonzalez, M. M., 1993)。実際、ずっと黙ったままだったクライアントが、カウンセリングに一匹の大きな犬を介在させたところ、犬に向かって自分の心の問題を打ち明けはじめ、カウンセリングが順調に進み問題が解決できた事例報告もある。学級経営の中で、子ども達が犬と活動を共にすることで自己開示が進んで行くことがある。

## 2) 先行研究

1970年代になって、人と動物の相互作用効果についての知見が次第に蓄積されるようになった。コンパニオンアニマルが、飼い主のストレスを緩和し、孤独を癒し、身体的障害がある場合にはその補助をし、血圧を下げたり、その他付加的治療効果をもたらすことが見いだされ始めた。先駆的役割を果たしたのは、B. Levinson の研究と Corson 夫妻の研究であった。彼等の研究は、動物との密接な関わり合いが情緒障害や身体障害を持つ子どもや大人に治療的な価値をもつことを示していた。1977年米国で人と動物の相互作用に関する実践、普及、研究活動を支援するデルタ協会 (Delta Foundation) が設立され (この場合の Delta とはペット、ペットの飼い主、世話を与えるもの、の3者関係を意味)、さらに1979年にスコットラン

ドのダンディー大学で「The Group for the Study of the Human-Animal Bond」が結成されて、以下のガイドラインを作成した。

- ① 人とコンパニオンアニマルの間の情緒的、心理的絆の性質を研究する。
- ② この絆が、ペットの飼育の情緒的福利と心身の健康に及ぼす影響について研究する。
- ③ コンパニオンアニマルが、社会において果たすその他の役割について考える。
- ④ 上記との関連で、人とコンパニオンアニマルとの相互作用を扱う学際的なアプローチをつくるために、さまざまな健康管理業やソーシャルケアに関係する職業の役割について研究する。
- ⑤ 情報を収集し、人とコンパニオンアニマルとの相互作用についての研究を奨励して、実際的な利益が生まれるようにその情報を宣伝する。

ペット動物が人の心身の健康に与える影響は、心理的効果、身体的効果、社会的効果の三つに分類されている。心理的効果は自己認識や情緒面の改善を目指し、身体的効果は病気からの回復、血圧や心機能などの正常化、四肢麻痺の改善効果等であり、社会的効果とは、他者との会話の増加、引きこもりからの脱却、治療スタッフとの協力関係の形成等対人関係の改善効果を指す。心理的効果に関しては自らが如何に未熟であっても、社会的関係性において上位にあって役立つ保護者の役割を果たすことができるという意識を持つことにより、それが自信を高め自己効力感を向上させるという。また Boris Levinson (1984) によれば、情緒面でペット動物の行動は一般に受容的で子どもを裏切ることはないので安心感が生まれ、不安や抑うつ低下に結びつくと説明されている。犬のようなペット動物は飼い主を拒否することなく無条件に受け入れ、人を愛するという特性も持ち感情表現が豊かなため、ペットと行動することで喜怒哀楽の感情が育成されやすい。Corson らは、「犬は批判なしに愛情と安心を提供する能力を持ち、支えたり、保護したりしようとする私達の本来的な傾向を刺激するために効果的である」(Corson, S. A., Corson, E., and Gwynne, P. H., 1975

b) と述べているが、Ross は「動物の愛情は、実際は無条件ではなく、動物が愛され正しく扱われたときにだけ愛情を返す。子どもが動物に愛情を注がず、いじめたりすれば、動物はその正直な反応として逃げたり、吠えたりする。その意味で、犬の訓練は非常によいレッスンを子ども達に与える。コンスタントに怒鳴っては言うことを聞かず、訓練する側が静かに愛情を持って接すれば自然に従ってくれる。それを観察することで自分の言動がどれほど周りに影響を与えるかを覚えていく」と述べている (Ross, S. 2001)。

#### A. 鬱病性障害へのアニマル・セラピーの効果

高齢者におけるアニマル・セラピーに抑うつ低減効果があることが、調査研究から示唆されている。コンパニオン・アニマルがいる高齢者は、いない高齢者よりも抑うつ鬱や孤独感が少なく、社会的交渉が多いことが報告されている (Connel & Lago, 1984)。また、アニマル・セラピーは、刑務所の服役者に対する抑うつ低減効果があることも示唆されてきている (Walsh, P. G. & Mertin, P. G. 1994)。被験者は、南オーストラリアの女子刑務所の服役者で、イヌの訓練プログラムに参加。プログラム参加期間は平均6ヵ月。参加前と後では、抑鬱感は低減し、自尊心は増加した。さらに、被験者からは、自分より先にプログラムに参加した人が落ち着きを取り戻し、怒らなくなり幸福そうになったため参加を決心したこと、また、訓練したイヌを高齢者施設などに連れていき感謝され、価値ある仕事をしていると思えたことなどが報告されている。

#### B. アルツハイマー型老年痴呆への動物介在活動の効果

アルツハイマー型痴呆の場合、生理的・認知的な衰弱から社会的に孤立したり引込み思案になったりしやすい。動物介在活動には、ポジティブな感情状態の維持、自尊心・責任感の向上、動機づけや現実性の改善などに効果があるとされている (Corson, Corson & Gwyne, 1975a ;

Levinson,1969 ; Brickel,1979 ; Katcher,1981)、同時に社会性の向上効果もあるとされている (Fields,1977 ; Frank,1984 ; Robb, Boyd & Pristash, 1980)。このようなことから、アルツハイマー型痴呆性の高齢者の社会性の改善プログラムとして動物介在活動が用いられるようになってきている。アメリカのオハイオ州シンシナティの老人ホームのアルツハイマー病ユニットで、1週間に1回、5週間にわたって実施されたイヌを用いた動物介在活動の結果は、イヌに対してなでる、抱きつく、微笑む、話すなどの行動が多く確認された。また、高齢者と介護スタッフとの社会的活動を増加させる効果も確認された。さらに動物介在活動により、患者に対する向精神薬の投与量を減少できたことも報告されている (Beyersdofler,P.S.& Berkenhouer, D. M.,1990)。

#### C. ターミナルケアにおける動物介在活動

死を迎える患者に対して行われる医療および心のケアを、ターミナルケア、ホスピスケア、緩和ケアと呼ぶ。患者は自分の死を告知されると、そのショックから始まる現実の否認、怒り、取り引き、抑うつ、死の受容の5つの段階を経験する (Kubler-Ross,1969)。ニューヨーク市の老人ホームで、イヌとネコを用いて毎週1時間半、10週間行われた動物介在活動のプログラムの結果、動物介在活動に向いている人と向いていない人がいるものの、ターミナルケアにおける動物介在活動には、不安や失望を低減し幸福感を増加する効果があること、また、特に温和でユーモアのセンスがあり、創造的で楽しむことができ、共感することのできる人が動物介在活動に向いているという (Muscel, I. J.,1984)。

#### D. 性的虐待と動物介在療法

子どもに対する虐待は、加害者となる者が最も身近にいて、それが信頼すべき保護者(多くは親)であるという点や、人格が形成されつつある時期に行われるという点で子どもへの影響ははかりしれない。性的虐待から生じる精神的な障害は心的

外傷となる。トラウマが原因となる精神障害として、PTSD (Posttraumatic Stress Disorder), ASD (Acute Stress Disorder,)、解離性障害、自傷行為、鬱病、鬱状態、パニック障害等があげられる (岡野、1995)。

虐待を受けた子どもの治療指針として①信頼関係を築く、②トラウマを探る、③自己感覚を取り戻す、といった方針があげられているが (Karp, C. L. & Butler, T. L., 1996)、動物介在療法の効果の中で、a) リラックス、くつろぎ作用、b) 自尊心・有用感・優越感・責任感などの肯定的感情、心理的自立を促す、c) 親密な感情、無条件の受容、他者に受け入れられている感じの促進、d) 感情表出 (言語的・非言語的)、カタルシス作用、e) 回想作用、f) 社会的相互作用、人間関係を結ぶ「触媒効果、社会的潤滑油」、g) 言語活性化作用 (スタッフや仲間との)、h) 集団のまとめ、協力関係、等がPTSDの諸症状との関係で注目される。

しかし、虐待における動物介在療法は、道具的で補助的な手段であり、治療としては、虐待について専門知識を持った者が中心になるべきである。子どもへの虐待によるPTSDでは、再体験が実際に遊びなどでその子ども自身によって再演されるということがある。このため、動物がその対象となる可能性があるので、動物の安全も考慮されなければならない。

#### E. 刑務所における動物介在療法

刑務所における動物介在療法は日本においてはまだ実施されていない。しかし、アメリカをはじめ各国で刑務所などの施設において、受刑者への矯正プログラムとして動物介在療法が実施され、成果をあげている。マスメディアなどでもよく知られたものとなっているアメリカ・ワシントン州のパーディ女子刑務所のプログラムでは、職業的なイヌの訓練・世話を身につけ就労への足がかりとするものである。このプログラムを通して、受刑者は自己によりイメージを持つようになり、自分を制御できるようになり、誠実さが培われると

いった効果が得られた (Hines, 1983)。このプログラムはその後さらに、障害者への援助を行う介助犬の育成プログラムに発展している。刑務所における職能訓練は、犯罪者を社会復帰させる目的でなされる。それは単なる技術の修得ではなく、よりよく社会に適応できる人格への更正を目指すものである。動物介在療法はこの点で、動物の飼育によって責任感を持たせ、社会貢献への喜びを見出すという効果を持っている。また、動物介在療法は自主性の回復という面でも社会復帰を促す効果を持つ。介助犬育成プログラムの取り組みでは、犬との関わりを通して、愛情と信頼を得た受刑者の自尊感情が高まることも報告されている。ここでは、シェルターから犬を連れてきて訓練するため、介助犬使用者を支援し、そして受刑者自身を救うという大きな効果が得られる。

#### F. 子どもに対する A. A. E. の実際

また、さまざまな心の問題や体の問題を抱えた子どもたちに、動物を介在させた活動や治療が有効である事が報告されている。アメリカの小児精神病棟では、難問を抱えた子どもたちの治療に、犬なら心が通い合うのではないかと一縷の期待が持たれ、スキーザーという犬が病院と一緒に暮らす試みがなされた。スキーザーはそこで子どもたちに、受け入れることの大切さを教え、スキーザーがかわいがられていることを目の当たりにした子どもたちは、自分も大切に扱われるだろうという安心感を持つことができる。黙ってそばにいて、スキーザーは子どもたちの心を癒したのである。

1961年 Boris Levinson は、ペットが「過渡的な対象」として機能し、子どもは最初にペットと、次にセラピストと、そして後には他の人々との関係を形成することができると報告した。さらに、「ペットセラピーに対して、最も反応性が高いと思われる臨床的問題は特に、言語習得以前の子どもや、抑制傾向のある子ども、自閉症児、退行性のある子ども、強迫観念のある子ども、そして文化的にハンディキャップを背負っている子どもで

あったこと、ペットセラピーに最適の年齢は5歳から14歳であるとしている (Levinson, 1972)。

Robin らは (Robin, M., Bensel, R., Quigley, J.S., & Anderson, R. K., 1983)、「子ども時代のペットと青年期における心理社会的発達」という論文で、ペットは青少年期の子どもの健康的な情緒や、身体の発達に大きな役割を演ずること。愛情、友好、責任の根源として、ペットは子ども時代から青年期を経て、若い大人への移り変わりを円滑にする手助けをすること。青年期にある人の多くが、極度の孤独感と、自分が理解されていないという感じを持っている人生におけるこの時期において、ペット動物が重要であること。少女少女たちの多くは、慰めを必要としているときに情緒的支えを求めてペットへと傾くこと。ペットは批判することなく無条件の支えを困窮状態にある少女少女たちに与え続けることができる、ということを発表している。

具体的な例として、筑波大学附属小学校3年1組での、クラスペット (モルモット4匹) の飼育の効果が報告されている。10人で1匹のモルモットを担当することで、相手を心配する気持ちが強くなる等のよい影響が見られ、動物に優しくすることができるということは、般化して人間にも優しくすることができるようになる可能性があるということである。また、動物を飼育することから、かわいだけでなく世話の大変さを知ること、そして実行することで、人間としての責任を学んでいくのではないかと考えられる。

#### G. B. Levinson の研究

Boris Levinson は長い臨床経験をもとに、特に子どもの面接場面において、本物の動物を介在させることが、治療に効果があることを提案した。最初1953年に「ひきこもりの子ども」たちとの対応の中で、効果的な役割を果たすイヌの可能性を洞察したときは変人扱いをされた (Levinson, 1962)。しかし、彼は、動物、特にイヌを治療場に介在させる効果について次の点から主張を続けた。第一に、子どもが治療を受ける際、動物をさわった

りなでながら話すことが治療のスピードを速める点、第二に、子どもが治療者や家族に話す代わりにイヌに話すことによって、健康な会話を取り戻す効果がある点、そして第三に、施設・寄宿舎での特に抑鬱状態の子どもたちにとって動物は愛する対象として存在するとき効果が高いことを強調した (Levinson,1964)。そして情緒障害児、特に言語が発達していない幼い子ども、自閉症の子ども、ひきこもりの子ども、強迫観念の子ども、そして文化的に不利な状況に追いやられている子どもたちにとって、ペットとしての動物を用いた治療は有効であることとその具体的方法について論じた (Levinson,1969)。

その後 Levinson は、その適応年齢を上げ、高齢者に対する動物介在療法が、接触のための機会増加、孤独感の軽減、運動の活発化、仲間意識の育成について治療として有益かどうかの可能性を検証し、その成果を著した (Levinson,1972 ; Mallon, 1994)。後に彼は自分の研究成果を次のようにまとめた。人間と動物の豊かな関係を築くためには、長い間の人間の文化や民族の関わりの中での動物の役割を検証すること、人間の人格の発達に関わる動物との交流の効を確かめること、動物と人間とのコミュニケーションの方法を確立すること、障害児や高齢者のために動物の治療的な使い方が正式な心理療法の中で行われ、制度が設定され施設での整備がなされること等が必要であるとしている (Levinson,1982)。さらに、心理療法において使用する動物は次の役割を果たすと述べている。

①精神療法の助手としての役割、②魂の治療者としての役割、③変化するためのカタルシスの対象としての役割、④本性や無意識そして世界と接触するための手段としての役割等である (Levinson,1984)。

これらの Levinson の技法はその後、臨床家や研究者によって検証され (Katcher , & Beck , 1983 ; Yates, 1973 ; 横山, 1996 ; 横山ら, 1996 ; Dossey , 1997) 今や、人間と動物の結合に関する分野での研究に貴重な貢献をしている (Mallon,1994)。

子どもにとって、動物を介在させた療法は、情

緒不適応事例だけでなく、社会不適応事例にも有効であり、自己理解の促進、自己受容、他者受容、罪悪感の減少、現実のゴール設定などに変化をもたらし、自己洞察と自己再構築を深めることが明らかにされた。M. J. McCuoch は次のようにその効果を次のようにまとめている。

- ・心理的効果：①良好な感情状態 (気持ちの高揚) ②協力 ③ユーモア ④遊び ⑤自己評価 ⑥必要とされる必要性 ⑦自立 ⑧動機づけの増加 ⑨教育 ⑩達成感 ⑪活発 (多忙) になるための刺激
- ・社会的利効果：①触媒効果「社会的潤滑油」「温かさのサークルの拡張」 ②社会的凝集 ③協同遊び (スポーツ) ④世話人との協力の増加
- ・身体的効果：①病気からの回復 ②病気との闘い ③神経筋肉系のリハビリテーション ④生活への期待

子どもにおける共感性の発達と社会化には、他者に対する感受性や反応性を励ましてくれるような相手と接する機会と、肯定的な自己概念とそれに基づく効力感が不可欠である。向社会的行動は、向社会的な規範が内在化され、向社会的な判断力ができあがるととれるようになる (菊池 1998)。しかしそれだけではなく、共感性即ち「他人の情動的反応を知覚する際に、その個人と共有する情動的反応」 (Feschback,1976) は向社会的判断と現実の行動とを結びつける要因と考えられている。私達に援助行動を誘発させるのはこの情動の共有である。

仲間関係に問題を生じやすい子どもは、社会的スキルに欠けている (Ladd,1985) ことがあるという。「思いやり行動 (向社会的行動) に関心をもってきたが、そこだけを見ていたのでは不十分で、もっと対人行動全体を広く見、そのなかで思いやりも考えるとよいと思う。ただ思いやりは、実際にそうした行動が出るかどうかのポイントですから、そうなるとそのためのスキルが必要である。そこで社会的スキルをとりあげることになる」 (菊池1994)。本研究では、思春期の生徒達 (中学生) の教育の場に、よく訓練されたゴールデン

レトリバーをとりいれ、A. A. A. を実施しその有効性について検証した。予防的なカウンセリングとしてA. A. E. を試み、向社会的行動尺度とともに、ソーシャルスキル尺度を用いて測定した。

### 3) 実施・調査方法

#### ① 実施対象

I 県内の公立 A 中学校：1 学年から 3 学年までの全校生徒 100 名。ゴールデンレトリバー（通称ルーシー）が常駐し、3 年間教員とともに通勤している。校舎の隅に自分の居場所がある。

I 県内の公立 B 中学校：1 学年から 3 学年までの全校生徒 99 名。A 中学校と同じ管内の同規模校。

#### ② 時期：2001 年 8 月末。

③ 調査内容：向社会的行動尺度（Prosocial Behavior）と社会的スキル尺度（Social Skill）、それぞれ 20 項目、（5 件法）で、大学生用の尺度を中学校の生徒に合うように一部文言を変更したものをを用いた。ルーシーがいる学校については、記述アンケート調査も行った（Appendix 1-3）。

④ 手続き：ルーシーがいる学校と同じ管内の同じ規模の学校で調査。

担任から、この調査が学校の成績や本人の評価等に全くかわりがないものであることを説明し、ホームルームの 15～25 分の時間をとって、記入を依頼した。質問紙への回答は、無記名で学年と性別のみを記入してもらった。

#### 4) 実験（A. A. A. : Animal Assisted Activity の実施）

① 対象：I 県内公立中学校の 2 学年 1 クラス 39 名（男子 20 名・女子 19 名）

② 実験時期：2001 年 12 月から 2002 年 6 月

③ A. A. A. の実験手続き：レオ（ゴールデンレトリバー）とエルザ（ゴールデンレトリバー）を用いた A. A. A. を行い、その前後で、向社会的行動尺度と社会的スキル尺度を用いて調査。また、A. A. A. の後は自由記述の感想を書いてもらい、さらにペットに関する愛着についてのアンケート C A S D（Companion Animal Semantic Differential (Poresky et al., 1988)）を行った（Appendix 4）。

#### Appendix 1 Prosocial Behavior

1 列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる。	1-2-3-4-5
2 お店で渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる。	1-2-3-4-5
3 転んだ子どもを起こしてやる。	1-2-3-4-5
4 あまり親しくない友人にもノートを貸す。	1-2-3-4-5
5 気持ちの悪くなった友人を保健室などに連れていく。	1-2-3-4-5
6 友人の係活動等を手伝う。	1-2-3-4-5
7 お年寄りに話しかけられたとき、話し相手になる。	1-2-3-4-5
8 気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、手紙を書いたりする。	1-2-3-4-5
9 何か探している人に、自分から声をかける。	1-2-3-4-5
10 バスや列車で立っている人に席をゆずる。	1-2-3-4-5
11 友人がケンカをしたり、泣いたりしているとき、なだめたりそばにいたりする。	1-2-3-4-5
12 雨降りのとき、あまり親しくない友人でも傘にいでてやる。	1-2-3-4-5
13 授業を休んだ友人のためにプリントなどをもらう。	1-2-3-4-5
14 家族の誕生日や母の日などに、手紙やカードを書いたりプレゼントしたりする。	1-2-3-4-5
15 見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる。	1-2-3-4-5
16 知らない人に頼まれて、カメラのシャッターをおしてあげる。	1-2-3-4-5
17 バスや列車で、荷物を網棚に載せてあげる。	1-2-3-4-5
18 知らない人が、落として散らばった物を一緒に集めてあげる。	1-2-3-4-5
19 ケガ人や急病人が出たとき、誰かに知らせたり介抱したりする。	1-2-3-4-5
20 自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる。	1-2-3-4-5



Appendix 2-1 児童・生徒用社会的スキル尺度

- 1 友だちが困っているとき、手助けする。
- 2 友だちが失敗すると笑ってしまう。
- 3 友だちが一人で寂しそうなときは声をかける。
- 4 友だちがいっしょに帰ろうと誘ってきたとき、断る。
- 5 友だちが何かをうまくしたとき、「じょうずだね」などとほめる。
- 6 友だちが本を読んでいるとき、面白いことがあれば、つい騒いで友だちのじゃまをしてしまう。
- 7 友だちがいっしょに帰ろうと誘ってきたとき、「うん、いいよ」と答える。
- 8 友だちが失敗したとき、励ましたりなぐさめたりする。
- 9 友だちとの約束を守らない。
- 10 ほかの友だちがいるところで、仲のよい友だちと内緒話をする。
- 11 友だちが困っていても、ついそのまま見過ごしてしまう。
- 12 友だちから何かを頼まれたとき、断る。
- 13 友だちに会ったとき、自分から声をかける。
- 14 友だちと話をしているとき、冗談などを言って、話がはずむようにする。
- 15 友だちを「ばか」などと、けなす。
- 16 友だちに「ありがとう」などと言って、感謝の気持ちを伝える。
- 17 友だちから何かを頼まれたとき、それに応じる。
- 18 友だちといっしょにいる。
- 19 友だちとの約束を守る。
- 20 友だちを遊びに誘う。
- 21 友だちに自分の物を貸す。
- 22 友だちに食べ物や飲み物をおごる。

Appendix 2-2 元の尺度 Kiss-18 (菊池, 1998)

- 1 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
- 2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
- 3 他人を助けることを、上手にやれますか。
- 4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
- 5 知らない人でも、すぐに会話が始まりますか。
- 6 まわりの人たちとの間でトラブルが起きてても、それを上手に処理できますか。
- 7 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
- 8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
- 9 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。
- 10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
- 11 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。
- 12 仕事の上で、どこに問題があるのかすぐにみつけることができますか。
- 13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
- 14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
- 15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
- 16 何か失敗したときに、すぐに誤ることができますか。
- 17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっているけど、うまくやっていけますか。
- 18 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。

Appendix 3 ルーシーについてのアンケート

- 1 あなたの家にはペットがいますか?   ・いる   ・以前はいた   ・いない  
 いると答えた人はペットの種類を書いてください。
- 2 あなたは今後、ペットを飼いたいと思いますか?   ・思う   ・どちらともいえない   ・思わない  
 思うと答えた人はペットの種類を書いてください。
- 3 犬は好きですか?   ・好き   ・どちらともいえない   ・嫌い
- 4 ルーシーが学校にいることをどう思いますか?   ・良い   ・どちらともいえない   ・よくない
- 5 ルーシーに触ったことがありますか?   ・しばしば   ・ごくたまに   ・ない
- 6 ルーシーと散歩をしたことがありますか?   ・しばしば   ・ごくたまに   ・ない
- 7 ルーシーが学校にいることでいいことはありますか?   ・ある   ・どちらともいえない   ・ない

- 8 ルーシーに話しかけたことがありますか? ・ある ・ごくたまに ・ない
- 9 ルーシーが学校にいることで困ることがありますか? ・ある ・どちらともいえない ・ない
- 10 友達や家族、先生とルーシーについて話すことがありますか? ・ある ・ごくたまに ・ない
- 11 ルーシーが学校にいることで学校の雰囲気が明るくなると思いますか? ・思う ・どちらともいえない  
・思わない
- 12 ルーシーに触っているとどんな気持ちになりますか?
- 13 ルーシーがいることでどんないいことがありますか?
- 14 動物(犬などのペット)は、あなたにとってどんな存在ですか?
- 15 ここ数年動物(ペット)の虐待(やけどをさせる矢をはなつ、殺す等)のニュースが多くなりましたが、それについてあなたはどのように考えますか?
- 16 自由記述(ルーシーのこと・犬のこと・人と動物のことなど)

## Appendix 4

CASD(Companion Animal Semantic Differential; Poresky et al.,1988): S D (semantic differential: Osgood,1952)法を用いた質問紙で、飼い主のペットに対する態度、特に感情を測定するものである。本来S D法は言語の意味測定のための方法だったが、その後、さまざまな対象の印象を測定するために使われるようになった。対象を記述する形容詞をいくつか選び、意味的に反対になるように両極尺度の形容詞対で5から7段階の評定尺度を作成し、被験者には対象ごとにこの両極尺度で評定する。得られたデータを因子分析して対象の意味次元を抽出し、その意味次元空間への対象の位置づけを行うことで対象の印象を明らかにする。Poreskyらは、最初に18項目6段階評定の形容詞対を試作し、最終的に9項目の形容詞対に修正した。CASDのクロンバックの $\alpha$ 係数は0.88であり信頼性が高いことが示されている。因子分析の結果は、第1因子「評価の次元」に7項目が関与していて負荷が高く、第2因子以下は負荷が小さかった。

## CASDで用いられる形容詞対 (Poresky, et al.,1988)

1	悪い		よい
2	愛している		愛していない
3	友好的		友好的でない
4	抱きしめたいほどかわいい		かわいくない
5	冷たい		温かい
6	快適な		不快な
7	親切な		残酷な
8	にくらしい		かわいい
9	遠い		近い

A. A. A. ①—教室にレオを連れていき、イヌと人との関わり方を解説する。イヌに抵抗がない生徒についてはできるだけ触れてもらう。イヌが嫌いな生徒や怖い生徒については無理をさせない。また、学校のカリキュラム等の関係で、定期的にはA. A. A.を実施できないので、イヌに関わる本〔『盲導犬になつたクイール』、『老人と犬』、『動物達へのレグイェム』、『もし犬が話したら人間に何を伝えるか』、『この子達を救いたい』、『子どもたちの心の病を治した犬』、『犬が生きる力をくれた』、『ダンとアン』〕の紹介等も行い、学級文庫として貸し出した。それによってイヌが嫌いな生徒達の抵抗を出来るだけ少なくしようと試みた。

A. A. A. ②—教室にレオとエルザを連れていき、触れてもらう。抵抗がある生徒達については、教室の中で触る、名前を呼ぶ、命令する、おやつを手から与える等の活動を行う。イヌが好きな生徒や抵抗の少ない生徒については、校庭で、名前を呼ぶ、ボールを投げる、拾ってきたら褒める、おやつを手から与える等の活動を行う(教室と校庭の2カ所に分かれるため、ボランティア1名参加)。

A. A. A. ③—校庭でグループごとに活動。グループで円になり、レオとエルザを、はっきり声を出して呼ぶ。イヌが自分のところに来たら褒める、おやつを手から与える。イヌが来ない場合は、来た場合と比較して、呼び方等を考えさせる。どのような時にイヌが命令をきくのか(きかないのか)、嬉しそうか(不安そうか)等の観察をさせる。イヌが嫌いな生徒については無理をさせない。しかし、できるだけ触れる機会を作る(Appendix5)。担任から、この調査が学校の成績や本人の評価等に全くかわりがないものであること説明すること、ホームルームの15~25分の時間をとって、記入することを依頼した。質問紙への回答は、無記名で学年と性別のみということで記入してもらった。

Appendix 5 A. A. A. (Animal Assisted Activity)

「コミュニケーションの取り方」

指示を出す→応答があったら、しっかりほめる。声の大きさ、顔のむき(目をあわせる)、動作で、自分の気持ちをつたえましょう。

犬の気持ちの理解の仕方→しっぽのようす(振り方・高さ)、耳のようす(緊張しているかどうか)、顔のむき(目を合わせているか)

★自分が呼んだとき、指示をだしたときの犬の反応と、クラスの友達の場合とでの違いに注目しましょう。(誰のとき、犬が嬉しそうにしているか、自分のときはどうか。その違いは何のためか?を考えてみましょう。)

◎犬の反応がよかったとき→  
自分のとき→

◎今日の授業の感想

ありがとうございました。

5) 特殊学級での実施

- ① 対象：I 県内の公立中学校の特殊学級の生徒 5 名(1 学年男子 1 名、2 学年男子 4 名、ダウン症児 2 名、知的障害児 2 名、自閉傾向児 1 名)。
- ② 実施時期：2002 年 7 月。
- ③ 実施内容：レオ(ゴールドンレトリバー)

を用いた A. A. A. を実施し、その際の表情・行動観察を行った。A. A. A. の内容は、触れる、名前を呼ぶ、おやつを手から与える、おすわり等をさせる、ボール遊びをする、散歩をするという内容からなっている(Appendix 6)。

Appendix 6



6) 人と動物の心研究会での実施

- ① 対象：I 大学学園祭に実施の「触って学ぶイヌ学」の参加者。
- ② 実施時期：2002 年国立 I 大学の学園祭 10 月

(Appendix 7)。

- ③ 実施内容：「触って学ぶ犬学」人と犬の歴史、犬の性質、犬との関わり方等について、説明を行う。その後、犬と散歩し触れ合う。アンケート

トを記入してもらおう。活動の間、サーモカメラで体表面の温度の変化を測定した (Appendix 8)。サーモカメラ (日本アビオニクス社製・Neo Thermo TVS-620)

- ④ 手続き：「初めて犬にあいさつするとき、犬に触れるとき、犬の気持ちを知りたいとき、ど

うすればいいのでしょうか？ 犬に触れながら友だちになりませんか」というパンフレットを前夜祭に配り、参加者を募集、「触れ合い教室」等で人に慣れている秋田の獣医師の犬数匹、猫、ボランティアのかたに参加していただいた。

#### Appendix 7



1. ふれあい教室の始まり



7. 散歩についての説明

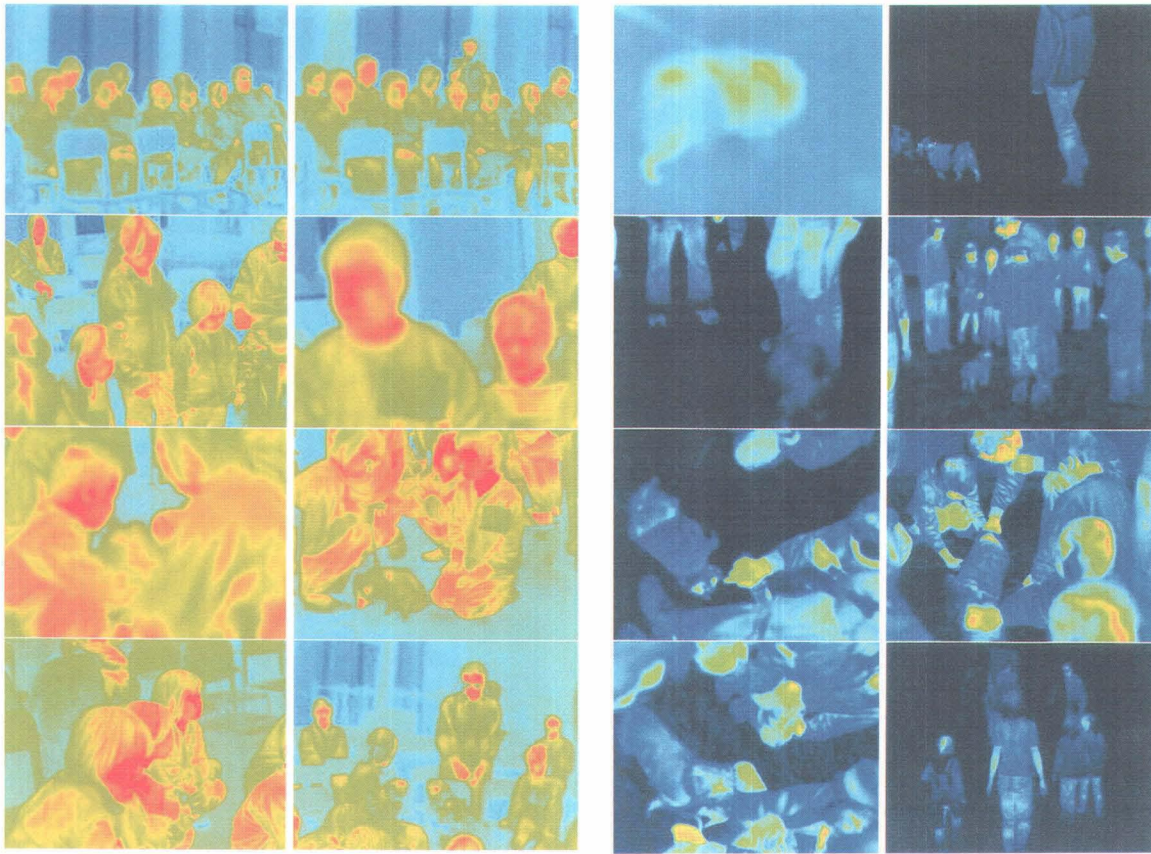


2. ふれあい教室の説明



8. リードをもって

Appendix 8



[岩手大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第6号に続く]

〈引用文献〉

1. Beyersdorfer, P. S. & Berkenhouer, D. M.1990 The therapeutic use of pets on an Alzheimer's unit. *The American Journal of Alzheimer's Care and Related Disorders & Research*, 5, 13-17.
2. Brickel, E. M. 1979 The therapeutic roles o car mascots with a hospital based geriatric population : A staff survey. *The Gerontologist* , 19, 368-369
3. Connel, C. M. & Lago, D. 1984 Favorable attitudes toward pets and happiness among the elderly. In R. K. Anderson, B. L. Hart & L. S. Hart (Eds.): *Connection : its influence on our health and Quality of life*. Minneapolis : Censhare , 241-250.
4. Corson, S. A., Corson, E., & Gwyne, P. H. 1975A Pet Facilitated Psychotherapy in a Hospital Ssetting. In H. J. Masserman(Ed.) : *Current Psychiatric Therapies*. Vol.15, Philadelphia : Grune & Stratton.
5. Corson, S. A., Corson, E., & Gwyne, P. H. 1975b Pet-Facilitated Psychotherapy. In R. S. Anderson, (E d.), *Pet Animals and Society*, London :Bailliere-Tindall. pp. 19-36.
6. Feshbach, N .D .1976 Empathy in Children : A Special Ingredient of Social Development (Paper given at the Western Psychological Association meetings, Los Angeles, April), p.2.
7. Fields, S.Y. 1977 Pet-person social interaction in institutional setting : An ethnomethodological analysis. *Dissertation Abstract International*, 38 (11A), 6941 (University Microfilms No.78, 5838)
8. Frank, S. J. 1984 The touch of love. *Journal of Gerontological Nursing*, 10, 29-35.
9. Hines, L. M. 1983 Pets in prison : A new partnership. *California Veterinarian*, 5, 7-11.
10. Karp, C. L. & Butler, T. L. 1996 *Treatment Strategies for Abused Children : From Victim to Survivor (Book and Activity Manual)*(板井聖二・西澤哲訳 1999「虐待を受けた子どもの治療戦略」 明石書店.)
11. Katcher, A. H. 1981 Interactions between people and their pets : Form and function. In B. Forgle, (Ed.) *Interrelations between people and pets*. Springfield : Charles C. Thomas.
12. Katcher , A. H. & Beck, A. M. コンパニオン・アニマル研究会 (訳) 1983 「コンパニオン・アニマル」人と動物のきずなを求めて 誠信書房.

13. 菊池章夫 1994 社会的スキルとは 菊池章夫・堀毛一也(編著)「社会的スキルの心理学」川島書店 pp. 1-22.
14. 菊池章夫 1998 「また／思いやりを科学する」向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
15. Kubler-Ross, E. 1969 *On Death and Dying*. New York : Macmillan.
16. Ladd, G. W., & Asher, S. R. 1985 Social skill training and children's peer relations. In L. Abate & M. A. Milan (Eds.), *Handbook of social skills training and research*. New York : John Wiley & Sons, 219-244.
17. Levinson, B. M. 1962 The dog as co-therapist. *Mental Hygiene*, 46, 59-65.
18. Levinson, B. M. 1964 Pets : A special technique in child psychotherapy. *Mental Hygiene*, 48, 243-244.
19. Levinson, B. M. 1969 Pets and old age. *Mental hygiene*, 53, 364-368.
20. Levinson, B. M. 1969 *Pet-Oriented Child Psychotherapy*. Springfield, : Charles, C. Thomas.
21. Levinson, B. M. 1972 *Pets and Human Development*, Springfield, : Charles, C. Thomas.
22. Levinson, B. M. 1982 The future of research into relationships between people and their animal companions, *International Journal for The study of Animal Problems*, 3, 283-294.
23. Levinson, B. M. 1984 Human / companion animal therapy. *Journal of Contemporary Psychotherapy* , 14, 131-144.
24. Mallon, G. P. 1994 A generous spirit : the work and life of Boris Levinson. *Anthozoos*, 7, 224-231.
25. Muschel, I. J. 1984 Pet therapy with terminal cancer patients. *Social casework : The Journal of Contemporary Social Work*, 65, 451-458.
26. 岡野憲一郎 1995 外傷性精神障害のスペクトラム, *精神科治療学*, 10, 9-19.
27. Robb, S. S. , Boyd, M. & Pristash C. L. 1980 A wine bottle, plant and puppy : Catalysts for social behavior. *Journal of Gerontological Nursing*, 12, 721-728.
28. Robin, M., Bense, R., Quigley, J. S., & Anderson, R. K. 1983 子ども時代のペットと青年期における心理社会的発達 Katcher, A. H., Beck, A. M., (編) *コンパニオン・アニマル研究会* (訳) 1996 「コンパニオン・アニマル—人と動物のきずなを求めて—」誠信書房. pp. 158-168.
29. Ross, S. 2001 「傷ついた子どもたちと動物を同時に救うシステム」—グリーンチムニーズの活動から— *Relatio* vol. 8, 34-37.
30. 内田由起子・北山忍 2001 「思いやり尺度の作成と妥当性の検討」*心理学研究*, 72, 275-282.
31. Walsh, P. G. & Mertin, P. G. 1994 The training of pets as therapy dogs in a women's prison : a pilot study . *Anthozoos*, 7, 124-128.
32. Yates, E. 1973 *Skeezer : Dog with a mission*. New York : Harvey House, Inc. (諸岡敏行 (訳) 1991 「子どもたちの心の病を治した犬」 草思社.
33. 横山章光 1996 「アニマル・セラピーとは何か」NHKブックス.
34. 横山章光・大澤あかね・野村総一郎・柴内裕子 1996 精神医学領域におけるアニマル・アシステッド・セラピー —その適用と効用—, *精神科治療学*, 11, 491-498.